5/31 読

草加の空き家 洋食店に再生

市事業化3例目 懐かしさあふれる店内に

草加市住吉の旧日光街道沿いで、築46年の空き家を再生した「洋食屋アタ―ブル」がオープンした。空き家の活用を図る市の取り組みで、事業化は3例目。

落ち着いた雰囲気の店内（草加市で）

木造2階建ての住宅兼店舗だった建物は約20年間、空き家となっていた。22日に開店した店は、和室や階段など元の構造を一部残し、年季の入った木製テーブルや懐かしい学校の椅子などを配置。和室にはちゃぶ台があり、家族でだんらんしながら食事できる。

店主の阿久津修さん(43)は越谷市出身で、現在は草加市在住。都内のホテルで修業を積み、赤坂迎賓館の調理やJリーグの食事を担当したこともある。オープン前から市職員の間で「デミグラスソースが絶品らしい」と評判になっていた。

市は2017年に、市内の空き物件の活用を考える「リノベーションスクール」を開催。参加した阿久津さんによると、店のぬくもりあるインテリアは、スクールで出会った仲間たちのアイデアが詰まっているという。

スクールからこれまでに、休業中のすし店を改造した野菜とお酒のバル「スバル」と、取り壊し予定だったアパートを活用した料理教室「キッチンスタジオアオイエ」が誕生している。

市産業振興課は「若い人が中心になって盛り上げてくれることが、市の将来につながる」とし、6月にはさらに3軒がオープンするという。来年1月には3回目のスクール開講も予定している。問い合わせは同課（048・922・0839）へ。

洋食屋アタ―ブルの外観

田んぼアートは「ナスカ」

行田市 来月16、17日に田植え

行田市は30日、11年目を迎える同市小針の「田んぼアート」の今年のデザインについて、「大いなる翼とナスカの地上絵」と発表した。東京五輪キャンプ地誘致などを通してつながりができたペルー大使館の後援を得て、同国のナスカの地上絵をモチーフにした。

キャンバスは、約2・8㌶の田んぼ。中央に大きなコンドルを描き、左下に地上絵のコンドル、中央下にハチドリをあしらい、市のシンボル「古代蓮」も添える。8種類の色育て、コンピ
る遠近法を駆使
る。今年は2色
て微妙な色合い
に初挑戦する。

来月16、17日
00人の市民が
田植えを行う。
ら見頃になり、
まで楽しめる。

行田の田んぼ

行田市が発表した今年の田んぼアートのデザイン「大いなる翼とナスカの地上絵」（30日、行田市役所で）

越谷は「

今年で9回目
市の夏の風物詩
田んぼアート」
が、同市出身の
士・阿炎関が高
げて四股を踏む
名、市制60周年
などに決まった
来月3日、同

ふれあ

募金の振込先
埼玉りそな銀行
普通08
武蔵野銀行県庁
普通06

仮設工事会
仮設工事業
（さいたま市南

てほしい」とあいさつ。市

ガイドブックは、企画し

展示されているムラサキ